



World Council  
of Churches



日本時間(協定世界時+9時間)、2015年8月5日午後7時まで保留

英国国教会—カトリック合同平和記念礼拝のメッセージ  
2015年8月5日、広島のカトリック平和記念聖堂にて

世界教会協議会の副議長、及び世界教会協議会指導者による原爆投下70周年記念の日本への巡礼の旅の使節団長、合同メソジスト教会メリー・アン・スウェンソン主教

## 生涯かけて平和を作り出す

申命記 30:15-19、ルカ19:41-42、マタイ5:9

死でもってキリストは死を克服し  
蘇ることでキリストは私達の命を回復し  
キリストは栄光の中に再来する  
アレルヤ！アレルヤ！  
私達がイエス・キリストの中へバプテズマを受けるとき  
私達の死はキリストと共に埋められる。  
神の栄光によってキリストが蘇ったように  
新たな命の中を歩むために私達も創られたのだ。

この平和記念礼拝は、神の恵みの奥義というものに触れる機会でもあります。私達は、過去の悲劇を思いだして認識して、これを繰り返しません、と言うためにここを訪れました。神の「命を選びなさい」という呼びかけに従い、神の恵みという贈り物を受け取るために、そして、生涯平和を築くものとして身を捧げることを誓うために来たのです。イエスは「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう」と言い、私達はそのイエスに従っているのです。

今夜、私たちより一足先に、私たちの永遠の家に行った人々の命を思い、神に感謝します。今彼らを思い出すことは、哀れみと恵みに満ちた神のしるしを見ることなのです。

佐々木禎子さんのお話を聞いたのは、今から何年も前のことでした。北米の子供たちもその話を読めるように、と私の友人が彼女の話を書いたのです。日本人の皆様は、もうこの話をご存知だと思いますが、他国から訪れてきた人たちのために、この物語を説明させていただきます。禎子が2歳のとき、彼女の家から1マイルのところに原爆が投下されました。間もなく、彼女はおぞましい原爆症を発症します。折鶴は千年の平和と幸福を象徴するものなので、彼女は千羽鶴を折り始めたのです。彼女の死後も、彼女の級友は鶴を折り続け、現在では記念公園

に、平和の鶴をかかげる彼女の像がたてられています。言葉にはならないような残酷さの中で、平和を求める強烈な叫びが生まれたのです。今でも、私が会議のために、米国西海岸やハワイやその他の地域を訪れるとき、人々が何千、何万という折鶴を持ちより、会議中にも座りながら鶴を折っているのです。ある会議で、私の友達は7000羽の鶴を折り、私達は平和のために折り、その証人は増え続けているのです。

1990年代に、カナダ北部のSahtu-Deneの住民が、自分達の土地から産出されたウラニウムが広島と長崎を破壊した爆弾に使われたということをやうやく知らされたとき、彼らは謝罪のために長老の使節団を日本に送りました。私達もこのような証をするべきなのです。この世界教会協議会の巡礼の旅では、今回7カ国からの教会指導者たちが参加しており、彼らの国々はみな核兵器が無い世界を支持すると言っています。しかし、この何十年もの間毎年、同7カ国の政府は、核兵器をいつでも使える用意をしているのです。この地で破壊を目の当たりにした70年を経て尚、40カ国の政府が核兵器に頼っているのです。

「人類が生き残るために、核兵器はどのような状況においても、二度と使われてはならない」という方針が、今日、国連総会で大多数によって支持されたことをここで確認いたします。

兵器とエネルギーの用途が、人類や神の創造物にどのような影響を与えるか、ということをおまえて判断する時がきたのです。私達が物理的な快適さや便利さを追求するが故に、資源とエネルギーの消費量を考えることを避けていたということを告白する時がきたのです。また、核兵器の保持に対しての全ての支援をやめ、人の暮らしの大量破壊が、正当な自己防衛の手段であると容認することを拒否する時がきたのです。

1960年代、私は高校と大学で、討論チームのメンバーでした。毎年、核武装解除の議題で討論を繰り返していました。私達の世界が核により破壊される脅威が、50年を経た今日もあるということが信じられません。そして核兵器が廃止される代わりに、その威力も現代化されているのです。

原爆被害者である「被爆者」や韓国語では*pi-pok-ja*の方々、そして核実験の現場にいた被害者たちは、核の時代を終結することを訴えています。ハワイにいる私の友人は今、「広島、長崎を越えて」という礼拝を行っており、太平洋でも、マーシャル諸島の人々の話を語り伝えていくべきであると、彼らは信じているのです。この「被爆者」の話もまた、彼らの激しい苦しみにも係わらず、その話が世界に伝えられることは滅多にないのです。

(1946年から1958年までの)12年間、67発の核爆弾が諸島付近で爆破実験されました。最も強烈な爆弾はブラボーと言う名で、1954年に爆破され、それは広島に投下されたものの千倍の威力を持つ爆弾だったのです。今日も、被爆汚染のため、多くのマーシャル諸島の住民は家に帰ることができず、癌など放射能による病気によって苦しめられています。核廃棄物の保管用のある施設は、海面の上昇により壊滅の危険にさらされています。

私達は、核の被害で苦しむ全ての人たちの声に耳を傾けるべきなのです。遺伝子に突然変異がおこり、体が奇形となったり、土地や海が核実験で汚染されたり、農場や街々が原子力事故で汚染されたり、鉱山や発電所での作業で放射能にさらされた人たちの話に耳を傾けるのです。

聖書の始めに、神の臨在と創造の目的について、神は御言葉を通して語っており、神がお創りになった創造物に干渉することを戒めています。聖書の多数の箇所を通して、全ての創造物が不思議であり、その存在を祝い、讃える価値があるものだということを、私達に思い出させてくれます。申命記では、神が命と死、祝福と呪いを私達の前に置き、「命を選ばなければならない。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。」と神が言うのです。

私の同僚であり、ここに同席もしているスティーブ・シドラック氏は、何年も前に彼が牧師として仕えた教区にいたある人の話をしてくれました。その男性はパイロットとして、1945年に広島と長崎の破壊状況の写真を撮る任務を任された写真家と一緒に、上空を飛行したのです。彼が見たものは、彼の人生を変え、「これらの爆弾の跡を見た後は、気が違わないように必死だった」と彼は言うっており、その光景は彼が死ぬまで彼のことを苦しめたのです。でも後に、彼は幾人かの被爆者に会う機会があり、彼らに謝罪することによって、幾ばくかの平安を取り戻すことができたのです。

申命記にある聖句が言わんとしていることは明らかです。遅かれ早かれ死にいたる生き方というものがある、ということです。また、聖書的にも明らかなのが、死ではなく命を望む者は、死ではなく「命を選ぶ」ことが大切だ、ということです。今日の世界で危険なのは、創造主である神を崇めるよりも、創造物を破壊する力を崇めてしまう、ということです。私たちが大量破壊兵器のもとにひれ伏し、その威力の源、原子力を崇めると（その破壊力を誇ったり、環境破壊の力を嘆くものであっても）、私達は命ではなく、死を選んでいることになるのです。

だから今も、かつての時代のように、命を選ぶべきなのです。そうすればあなたとあなたの子孫は生きながらえることができるのですから！

神は、私達の寛大なる創造主で、命を呼んで創り出し、創造物の暮らしに繁栄をもたらしてくださいました。原子のエネルギーを、命を脅かしたり破壊する目的で使うことは、神の創造物乱用するの罪深い行為であります。私達の召しは、命を危険にさらすことではなく、命を守ることなのです。

イエスはエルサレムのために泣いて「しかし、あなた方は、わざわいである。義と神に対する愛とをなおざりにしている。」と言いました。主はまた「もしおまえも、この日に、平和をもたらす道を知ってさえいたら」と言い、また山では群集に「平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。」とも言いました。

今尚、世界中でも、自分たちの周りでも、暴力と苦しみと破壊の話しが後を絶えません。でも、この世界で起こっている暴力が、平和をつくり出す人となるための出発地点ではありません。その出発地点は内なるところにあるのです。これは、世界中にあるあらゆる霊的な教えからもいえることです。ガンジーも「世界を変えたかったら、自分がその変化となりなさい」と言いました。またイエスは「神の国は、あなたがたのただ中にあるのだ」と言いました。他の人に平安をもたらすためには、内に平安を持つことから始まるのです。これは個人にも、団体にも言える真理であり、キリストの身体としての真理でもあります。平和を作り出す人は、内側から作られ、その美しさはイエスが教えるところの内なる霊の旅路なのです。「こころの貧しい人たちは、さいわいである。悲しんでいる人たちは、さいわいである。」この最初の一步は、自分を空にして、神に、そして神だけに満たしてもらうことから始まります。「義に飢えてかわいている人たちは、さいわいである。あわれみ深い人たちは、さいわいである」とあるように、神が私達を満たしていくと、私達は正義に飢えてかわくようになるのです。そしてあわれみ深くなると、「清い心」という実がなり、私達の目が開かれ、神が見るように他の人を見ることができるようになるのです。この偉大なる戒はまさに誠実であり、私達が神を愛すると、それによって隣人への愛も生まれるのです。よって「平和をつくり出す人たちは、さいわいである」というのは、単純に言うと、平和は清い心から生まれる、ということなのです。平和を作り出すということは、あわれみが最も高度かたちであらわれたものなのでしょう。そして全ての創造物がお互いに、そして神と正しい関係を持てることを神が望んでいるのならば、神が行うことの御心は、平和を作り出すことなのです。

6月に宣教師のグループがここに集まったとき、みなでルカの10章1～12節を一緒に読み、神の目的がある働きとは、丁寧に人をもてなすことにいつもつうじている、とリーダーの1人が言いました。イエスは弟子たちと彼に従う者を村に送り出し、病気を癒し、御国についての福音を伝え、各場所で、ある家に入ったら、その土地から旅立つときまで、その家にとどまりなさいと言いました。時代を超えても、宣教活動の成功は、見ず知らずの人による相互のもてなしにかかっているのです。そのようなもてなしは、神からと、そして互いからも離れてしまいがちの人類への、神のうちにある愛を表したものなのです。主は「どこかの家にはいったら、まず『平安がこの家にあるように』と言いなさい。」と言っておられるのですから。

そして今夜、私達は、信仰によって、キリストの死の中で繋がり、キリストの中に生きるためだけに生まれ変わったことを思い出しましょう。

そして、神の国からの視点で見ると、現在の堕ちた観点から見て、うまくいくように見える富や権力や評判などを使ってのやりかたは、実は不幸を招くやりかたである、ということを出しましょう。私達は、いまあるこの世からの見返りを期待しない人間として生きるのです。

私達は、神との貴重な和解のために送られた神の大使なのです。

これらのことを覚えているからこそ、恐れなき愛とつながることができるのです。私達の神は、良い時の神でもあり、悲劇の中での神でもあります。だから「わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、何ものも、わたしたちを引き離すことはできないのである」という約束を信じることができるのです。そして愛というものを完全に信頼し、愛である神だけによって続けることができると信じるのです！

###